温故知新メディア散歩

内乱とバサラの美

― 林屋辰三郎『佐々木道誉』―

『ホビー白書』編集時、明治末に定着した「趣味」以前の言葉として「数寄」「道楽」「興趣」「余技」「好物」と並んで、「傾く」「伊達」という言葉を挙げた。本書の主人公バサラ大名は近世の男伊達や歌舞伎の＜プレ＞である。（菊地実）

バサラ大名

大河ドラマは戦国時代と幕末が好物らしいが、室町時代ほど政治と文化が一体となった変革期は稀ではあるまいか。昨日の敵が今日の友。関東・京・西国をひっきりなしに行き来する軍勢。凄まじい合戦と心の平安を得る宗教（特に禅宗）。尊氏・直義兄弟をはじめ、近年人物が見直されつつある高師直*1や本書の主人公バサラ大名・佐々木道誉たちがそれである。

バサラ＝婆娑羅は近年では料理屋やマンガにも使われる。原義は梵語「バジュラ」でダイヤモンドを表す。それが仏教十二神将・婆娑羅に変身。平安時代から鎌倉期にかけて雅楽・舞で従来の古式に則った演奏ではなく、自由な演奏を婆娑羅と称した。まぁクラシックに対するジャズのアドリブ演奏か。ここから「自由勝手に振る舞う・身分差無視・派手な格好」といったバサラに繋がる。また、大名といっても近世大名とは経済基盤も役割も全く異なっていた。南北朝から室町初期の守護は目まぐるしく変わる。ただし佐々木道誉は近江源氏で、古くから近江に定着していた。

＜平凡社ライブラリー＞

＜図表1＞本書の目次

序　近江と京都
Ⅰ　佐々木系譜
Ⅱ　建武の中興
Ⅲ　南北朝の出現
Ⅳ　勝楽寺開創
Ⅴ　「ばさら」大名
Ⅵ　観応の擾乱
Ⅶ　幕府の重鎮
Ⅷ　芸能中興の祖
Ⅸ　巨星墜つ
Ⅹ　太平記の世界

軍事・文化美・信仰三位一体

バサラ大名と呼ばれた佐々木道誉、土岐頼遠（美濃）、高師直（足利氏執事）の共通点は①戦に強い②乱暴狼藉（『太平記』による）③文化教養。特に道誉は和歌・連歌をはじめ、茶・能・花・香と室町時代に花開いた芸事の万能人であった。南北朝のダ・ヴィンチ！現代人から見ると、人殺しを業とする武将と文化教養・生活美と信仰心が三位一体になることが不思議に思

える。しかし逆説的に殺伐だからこそ、文化や美や信仰を強く求めたのだろう。夢窓疎石と足利直義の『夢中問答』を紐解くと、その辺を理解できる（ような気がした）。

近江の魅力

本書の書き出しは「比叡山は不思議な山である。京と近江の境界に聳えたち、京の街からは賀茂の川と並べられて東山三十六峰の主峰と仰がれ、近江の湖からは比良山地に延びる最高峰として見られて、一つの山が二つの顔を持っている」（10頁）と魅力的な文章で始まっている。この比叡山の裏おもてこそ、鎌倉期からの近江守護として京に出入りした佐々木氏のコウモリ的本質を表している。

「近江の持つ魅力とは何か。私の解き明かしたいのは、佐々木道誉を巡るその秘密である。その人は南北朝時代に、近江守護であるとともに、室町幕府の所領総論を取り扱った裁判機関の引付頭人としての重責をも担っていた、しかも単なる武人でもない風流人であった」（12頁）。今、新進歴史家がこんな文学的表現で歴史を記述したら批判されるかもしれない。しかし明治・大正・昭和の歴史家達は名文・美文家が多かった。ギボンやブルクハルト、さらにはホイジンガなどのヒューマニズムの流れを汲んだ西欧歴史家も名文ぞろいである。中世芸能史・文化史を叙述していた林屋はその掉尾を飾る史家かもしれない。

政治的流転

もともと道誉出家の理由は執権・北条高時出家に連座したもの。尊氏挙兵とともに味方につき軍功を挙げるが、政治的処世は鮮やか。『太平記』でも有名な妙法院宮を夜襲して焼き払う（1340年）。本来死罪だが、出羽に配流が上総に変更。さらに実際には近江国分寺以降は行方不明となり、貴族日記には怒りの記事が残る。

芸能の中興の祖

「日本芸能の開祖は、大概聖徳太子ということになっている・・・京極道誉*2の占める位置は、まさに＜中興＞というに値するであろう。彼の自由奔放な行為の中から、幾多の創造が生まれた・・・連歌は特に好む・・菟玖波集には八十余集収められている」（150-51頁）。バサラ大名も聖徳太子と比較されるとは名誉のことだ。

茶に関しては「茶寄り合いは二つの方向性・・・禅院の礼式本位の茶と、闘茶の掛物中心の茶」（155頁を要約）。道誉は両方を楽しんでいたらしい。

「道誉の手によって、花も香もバサラとなった」（160頁）さらに近江猿楽に詳しく、能・狂言などにも影響を与えていると指摘している。ただ残念なことに現在見直されている香道について、具体的記述はない。

「道誉は、南北朝内乱が生み出し・・・彼の残した風流の思い出は、今年も美しく咲いた道誉桜の中に込められている。大野原の花見は、多分この桜を立花と見立てるような豪壮な工夫であったにちがいない」（188頁）と結んでいる。

*1：有名な足利尊氏像は高師直らしい。

*2：佐々木氏は湖東の京極氏と湖南の六角氏に分かれる。出雲尼子氏も同族。

■筆者／ 林屋辰三郎、金沢の茶商林屋家に生まれる。親戚は学者一族で著名人が多い。1914年～1998年。京大文学部卒。立命館大学・京都大学教授。京都国立博物館館長。主な著書『歌舞伎以前』『町衆』『中世芸能史の研究』他、多数。

■書誌／ 平凡社、1979年刊行。平凡社ライブラリー（B6判変形）1995年2月。224頁、1,650円。